

延べ100万人動員 世紀の難工事

黒部ダム完成50年

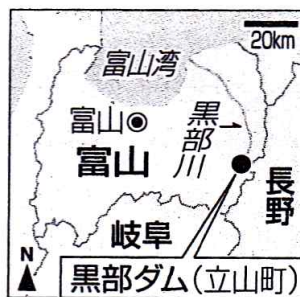
経済成長期の電力需要に因應するため巨額の資金を投じ建設された日本の代表的ダムの一つ、黒部ダム(富山県立山町)が五日、完成から五十年を迎えた。電力供給の主役は火力や原子力に移ったが、東京電力福島第一原発事故後に再生可能エネルギーとしての水力が見直される中、その歴史と役割に再び関心が集まりそうだ。

殉職171人を追悼

「世紀の難工事」と「陽」が昨年再上映された。建設工事では作業員ら百七十一人が殉職。技師らの苦闘を描いた映画「黒部の太

黒部ダムは、北アルプスの立山連峰と後立山連峰の間の黒部峡谷を流れる黒部川をせき止め、つくられたアーチ式のダムで、幅四百九十二メートル、高さは日本最大の百八十六メートル。総

貯水量は約二億トンドで、関西電力の黒部川第四発電所から、最大出力三十三万五千瓩の電力を関西方面に供給している。関電によると、黒部川の電源開発計画は一九一〇年代に始まり、第四発電所構想は四九年に公表された。電力再編で五一年に発足した関電は、五〇年代に関西が深刻な電力不足



に見舞われる中、五六年に工事に着手。世界の銀行の融資も受け、総工費は資本金の五倍に当たる五百十三億円に上ったという。延べ一千万人を動員した工事では、資材などを輸送するためのトンネル掘削中に、出水が絶えない軟弱な地層「破碎帯」が見つかり、最大の難所となった。約八十メートルを掘り進め貫通するまでに七カ月を要し、「黒部の太

陽」はこの際のトンネル技師らのストーリーだ。経済成長を担った水力発電だったが、総発電量に占める割合はその後低下の一途をたどり、新規のダム建設では、環境への負荷や大規模公共事業としての妥当性も厳しく問われるようになった。関電は、ダムの観光資源としての活用や、周辺の景観維持にも配慮。下流の川の水位が下がる六、十月に、ダム本体の最大約百二十メートルの高さから水が勢よく噴き出す「観光放水」を実施し、これまでに五千万人以上が訪れたという。